

## BVS・CS部門プログラム実証の取り組みについて

2020年5月15日  
日本連盟プログラム委員会

## 1. はじめに

BVS・CS部門は、2018年(平成30年)12月から実証団の選出と説明会を行い、3か月間の研究集会を経て、2019年(平成31年)4月から2020年(令和2年)3月までプログラム実証を行った。

その結果を纏め、以下に報告する。

## 2. 報告実証団概況（2019年度初期登録）

所属	スカウト				指導者			合計	
	BVS	CS	その他	計	団	隊	計		
東京	町田 9	2	4	18	24	6	16	22	46
		・スカウト数はRSの登録見直しなど2012年度の68名から激減。							
東京	新宿 18	5	5	1	11	7	9	16	27
		・2019年度はBS隊無、指導者の半数は団指導者。							
神奈川	横浜 30	6	30	47	83	6	20	26	109
		・2012年度より100名以上を維持、県内でも団のスカウト数が4番目に多い。							
神奈川	横浜 87	4	8	15	27	8	20	28	55
		・スカウトが減少しカテゴリーCとなった少数団。							
埼玉	さいたま 208	9	20	17	46	12	21	33	79
		・ここ10年間で団登録人数に大きな変化は見られない。							

※2019年度全国県連盟コミッショナー会議（第2回）の中間報告より、2団減少。

町田 20 団：期日までに最終報告書の提出無し。

豊島 17 団：実証の中核をなす指導者が体調問題で対応出来ず、実証継続が困難。

### 3. 実証活動年度の地区内人数増加上位団及び、実証団の新規スカウト状況（2019年度）

所属			加盟登録対象			加盟登録非対象				合計
			BVS	CS	計	年長	年中	年少	計	
東京	町田	町田20	4	4	8	—	—	—	—	8
		町田13	4	1	5	—	—	—	—	5
		町田9	3	1	4	0	1	0	1	5
		町田1	2	1	3	—	—	—	—	3
		町田6	0	2	2	—	—	—	—	2
	大都心	千代田1	9	4	13	—	—	—	—	13
		港16	8	1	9	—	—	—	—	9
		中央10	3	5	8	—	—	—	—	8
		港14	3	4	7	—	—	—	—	7
		港5	5	1	6					6
		新宿18	4	1	5	1	1	1	3	8
神奈川	みなと	A	8	6	14	—	—	—	—	14
		B	6	3	9	—	—	—	—	9
		横浜30	5	3	8	3	5	1		17
		横浜87	7	1	8	5	4	0		17
		C	5	3	8	—	—	—	—	8
埼玉	さいたま南	A	6	6	12	—	—	—	—	12
		さいたま208	7	3	10	2	1	0	3	13
		B	2	4	6	—	—	—	—	6
		C	2	2	4	—	—	—	—	4
		D	2	1	3	—	—	—	—	3

**考察**

横浜30団、87団：実証団施策には保護者、スカウトともに好評、年長児年代は全ての子供たちが上進。

さいたま208団：例年に比べ実証のCS隊（1年生～4年生）の入隊が増加。（昨年4名）

町田9団：年長児年代以下の拡大に苦勞。

新宿18団：実証団としての各種施策を実施することで加盟員増加。

#### 4. BVS隊の活動状況

- ① 合同集会、及び団集会を中心に実証。
- ② 年長はグループ活動、CS 隊との合同集会も可能。
- ③ 年中については、知的・身体的・社会性等の個人差が大きく、保護者との関係が中心であり、個別的な関わりが活動提供の方法となる。

#### 5. CS隊の組数状況

所属	年度	区分	CS スカウト数	組数	各組の人数				
					1組	2組	3組	4組	
東京	町田9	2019 (実績)	従来(3年生～5年生)	5	2	3	2	—	—
			実証(1年生～4年生)	7	2	4	3	—	—
		2020 (予定)	従来(3年生～5年生)	3	1	3	—	—	—
			実証(1年生～4年生)	7	2	4	3	—	—
	新宿18	2019 (実績)	従来(3年生～5年生)	3	1	3	—	—	—
			実証(1年生～4年生)	10	2	5	5	—	—
		2020 (予定)	従来(3年生～5年生)	6	1	6	—	—	—
			実証(1年生～4年生)	11	2	6	5	—	—
神奈川	横浜30	2019 (実績)	従来(3年生～5年生)	31	4	8	8	8	7
			実証(1年生～4年生)	26	4	6	8	7	5
		2020 (予定)	従来(3年生～5年生)	24	4	6	6	6	6
			実証(1年生～4年生)	20	4	5	5	5	5
	横浜87	2019 (実績)	従来(3年生～5年生)	8	2	4	4	0	—
			実証(1年生～4年生)	15	4	4	3	4	4
		2020 (予定)	従来(3年生～5年生)	12	2	6	6	—	—
			実証(1年生～4年生)	15	3	5	5	5	—
埼玉	さいたま208	2019 (実績)	従来(3年生～5年生)	17	2	9	8	—	—
			実証(1年生～4年生)	25	3	8	8	9	—
		2020 (予定)	従来(3年生～5年生)	18	2	9	9	—	—
			実証(1年生～4年生)	22	3	7	7	8	—

#### 考察

- ・もともとの団規模に関わらず、組数及び各組の人数が増加。
- ・CS隊全体及び、各組の活動が活性化(各指導者所感)。

## 6. 実証に対する指導者の評価

所属		内容
東京	町田 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい取り組みである団集会は、大変に効果的かつ保護者、スカウトに好評。</li> <li>・カブスカウト部門の活動人数の増加により、団全体の活動が活性化。</li> <li>・特に小学校1年生、2年生のモチベーションが高く、保護者も交えて熱心に活動。</li> </ul>
	新宿 18	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カブスカウトの人数が増え活動ができたことは、少人数団の当団にとって効果大。</li> <li>・活気がでたことで指導者のモチベーション向上。</li> <li>・新しいプログラムの展開（グループワーク・問題解決・構造化・視覚化）を取り入れ工夫をすることで、スカウトがのびのびと自由に創造し活動。</li> <li>・低学年はまだ個人差が大きいので助けることも必要。</li> </ul>
神奈川	横浜 30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい年齢区分に問題無し。ただ、新しいプログラム開発の視点、時代に合った展開が必要。</li> <li>・自団の状況により、多様性に対応したシステムが必要。</li> </ul>
	横浜 87	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい年齢区分で1～2年生の成長を促進実現。</li> <li>・4年生のリーダーシップの場面増加。</li> <li>・今までより、活動プログラム実施に時間を要する場面有り。個々への目配りが必要。</li> <li>・新しい取り組みで活動の幅が広がりより活発化。</li> </ul>
埼玉	さいたま 208	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人数、組数が増えたことにより、全体が活発化。</li> <li>・1年生については体力面で不安、疲れてくると集中力低下。</li> <li>・1、2年生への安全対策含め、組活動のなかで対応に苦慮。</li> <li>・4学年でスカウトに興味を持たせるプログラムの開発要。</li> </ul>

## 7. 実証団の2020年度年齢区分選択

所属		年齢区分選択
東京	町田 9	カブスカウト部門を小学1年生4月から小学校4年生3月とする。 ・団内に新しい体制の理解広がり、引き続き実証体制にて活動実施。
	新宿 18	カブスカウト部門を小学1年生4月から小学校4年生3月とする。 ・前年度の合同集会や縦割りグループの団集会などにより、新1年生がスムーズにカブスカウトとして活動できること、本人がカブスカウトになること(年上スカウトとの仲間に入ること)を非常に楽しみにしていることから、引き続き実証体制にて活動実施。 ・合同集会や団集会の経験から、新1年生がカブスカウトになることにとても意欲的であったため、引き続き実証体制で活動実施。 ・今後については検討の余地有、年長BVSの状況(ビーバー隊活動経験期間・隊人数・個人の状況)により、1年生9月選択も有り。
神奈川	横浜 30	カブスカウト部門を小学1年生9月から小学校5年生9月とする。 ・新しい年齢区分に問題無し。 ・ただ、BS隊は5年生9月からの希望が有り、本区分を選択。
	横浜 87	カブスカウト部門を小学1年生4月から小学生4年生3月とする。 ・2年近くに及ぶこの体制になれてきたため体制の不安無し。 ・1年生のカブ隊活動は考慮したプログラムの必要有り。
埼玉	さいたま 208	カブスカウト部門を小学1年生9月から小学校5年生9月とする。 ・指導者としては1年生についてはかなりフォロー要 ・体力、集中力の差が大きく、安全管理が今まで以上に必要。 ・1年生の夏季舎営対応に苦勞。 ・一部の保護者より小学校入学とボーイスカウト準備が重なり大変との意見有り。 ・体が小さい為、制服がオーダーメイド。

※上記のカブスカウト部門への上進時期の違いは、2019年度から2020年度の各団それぞれの体制、人数構成などを踏まえて各団で主体性を持って判断した結果。  
同じ団であっても次年度は4月また9月からの上進を選択する可能性有り。

## 8. 各実証団の取り組みから得られた効果と次への期待

今回の実証研究は、単なる年齢区分や進歩課程の改定案の提示のみにとどまらず、日本連盟の中長期方針に基づく、中途退団の抑止、加盟員増加、自立したスカウトの育成等を実現するための具体的提案として、これまでの枠組みに捉われない新しい視点とその視点に基づく新しいプログラムを実践した。（「実証研究取り組みハンドブック（改定第8版）」より）

[プログラム開発研究(少人数・多人数)のための新しい視点]

### ✓ 団集会

年長のスカウトの姿を見せるためスカウトスキルを活用した団集会や団行事を拡充する。

### ✓ 合同活動

少人数隊は、ビーバー隊とカブ隊での合同活動を展開する。

### ✓ グループワーク

少人数、短時間であっても、集会の中にグループワークを必ず入れる。

### ✓ 問題解決型活動

活動への動機付けを高めるために、スキルの学習と体験の積み上げによって習熟を目指す形式の活動だけでなく、現実的な課題（答えのない問題、課題）を提供し様々な工夫をしながら展開する力（活用力）やグループとして取り組み、協力しながら達成を目指す力（実行力）を養うための連続プログラムを取り入れる。

### ✓ 親子参加

親子体験のプログラムを取り入れ、保護者との関わりを持たせる。

### ✓ 各学年の目指すべき姿と組長・次長の役割

進歩の目標を意識したプログラム開発を行い、組長・次長の役割は明確に伝える。

### 8.1. 新たなプログラム開発で効果のあった視点

#### ① 団集会

スカウト、保護者、指導者ともに評価が高く、開発の余地が大きい。組織拡張のきっかけと運動の理解に繋がる。

#### 各団意見詳細

- ・保護者がスカウト運動と子どもの将来の姿を想像するのに最適のプログラムであり、部門を越えて年長スカウトが年少スカウトや保護者に教える展開が効果的。
- ・保護者もスカウトスキルの意味を、体験を通して理解。
- ・新しい視点でのプログラム開発の余地多数。
- ・ボーイ隊スカウト5年生1名に対し、団集会にて年下スカウトとは違う役割を与え披露する場、ボーイ隊スカウトの参加モチベーションと意識が向上。
- ・団集会を効果的に活用することでボーイ隊スカウトの活動への参加モチベーションと自覚が向上。

#### ② 合同集会

団集会と同様に効果が期待できる。

#### 各団意見詳細

- ・指導者の確保ができるため、常時合同で実施。
- ・実証の年齢区分では、未就学児を活動の中で目標や取り組む時間を分け活動する場面増。
- ・小人数団では団内及び、地区内他団との協働活動を行い、成果有り。
- ・少人数編成のため各隊個別より、セレモニー・ゲームに躍動感と盛り上がり。
- ・CS・BVSの指導者がともに全体を見る状況で、取組み内容に対し指導者が柔軟に支援可能。
- ・回を重ねるごとに各隊スカウトの仲が良くなり、活発に活動可能。

### ③ グループワーク

C S隊の組数の増加により、スカウト運動の本質であるグループ活動が活性化した。さらに、縦割りの合同活動によって、デンコーチ等のジュニアリーダー活動も確保された。

#### 各団意見詳細

- ・ 年長、年中の場合は、短時間での大人が介在する状況での活動。
- ・ 年長者の役割、保護者の役割をある程度事前に説明しておくことで効果的なグループワーク実施可能。
- ・ グループワークの複数回実施によりスカウトに慣れ。
- ・ ゴールをイメージできるかどうか個人差有り、イメージできないと主張も妥協もできず、参加実感のないままで外れてしまうこと有り。当該ケースでは大人が支援や提案を実施。
- ・ 創作するグループワークにおいては、イメージを膨らませる素材を見せることが効果的。

### ④ 問題解決型活動

スカウトのモチベーションを高め、創造性や自主性、協調性を育む可能性があることが認められた。

#### 各団意見詳細

- ・ 組のメンバーだけでの問題解決が重要。
- ・ 当団のプログラム「グローバルカンパニー」は屋台の経営（企画・購入・販売・会計）を通して、問題解決能力の育成とグループワーク力を育てることを実現。活用力つまり生きた力を育て、充実感を実感。
- ・ 正解がない、正解を誘導しないということを念頭におき指導。
- ・ ビーバー隊では段ボールを与え、自分が思う暖かく暮らせる楽しい家の作成プログラムを実施、独創的なものを創作。

### ⑤ 親子参加

保護者がウッドクラフトの魅力を体験的に理解し、自身の子どもがスカウトとしての将来に向けた成長を実感できる場となることが確認された。

#### 各団意見詳細

- ・ 保護者自身が楽しく、スカウトスキルを年長スカウトから教わり、体験的にスカウトスキルの意味を理解することが実現。「災害の時に役立ちますね」「BSやVSは上手に優しく教えてください」と言う感想有り。
- ・ 団行事以外で、父親の参加（12家族中半分）が増加。
- ・ カブ隊の組長会議、組会議といった流れに感心を示す。

## ⑥ 各学年の目指すべき姿と組長・次長の役割

この2点を常に指導者が意識することで、スカウトの成長が期待できることが分かった。しかし、目指す姿をさらに具体的に示すことが必要である。

### 各団意見詳細

- ・ 今回の組長の具体的役割も4年生には妥当。
- ・ 全員が組長と次長を体験の為、期間を決めて組替えを実施したことは有効。
- ・ 役割がスカウト自身の成長を促すことは明らか。
- ・ 低学年が入り、組としての一体感やまとめるのが困難。
- ・ (今回提示された「進歩の目標」に沿って記載。)   
ビーバー『元気』: 妥当。  
りす『自信』: 1年生は個人差を大きく実感。「自信を持って活動ができる」という言葉は目標として妥当。  
うさぎ『自立』: 妥当。  
しか『協力』: 妥当。  
くま『組のリーダーシップ』: 妥当。
- ・ ビーバー隊はボーイスカウトの匂いがするプログラムを実施し、元気に活動。

## 8.2. 隊運営上で効果があった視点

### ① 組数の確保と増加

4学年課程にすることで、組数の確保と増加が期待でき、スカウト運動の本質であるグループ活動が活性化した。

### ② 合同集会

少人数団や指導者不足の団にとっては、指導者の協働と負担軽減に繋がる。



## 【参考】

実証団結果を受け、プログラム委員会としての意見を記載致します。

### 1. BVS・CS隊の年代見直しに関して

BVS隊: 年長児年代～小学1年8月 CS隊: 小学1年9月～小学5年9月(4月から月の輪)が良いと考えております。(以下、理由を箇条書き)

- ・実証隊ではCS隊を4年間としたことでのスケールメリットが大きい。  
(組数増、スカウト数増による活動活発化)
- ・CS隊活動上、小学1年4月開始のスカウトは体力面、理解面で難しいところがある。  
(指導者側の負担も増加)
- ・ボーイスカウト活動のエントリーとしてのBVS活動期間が短いと、保護者の活動理解不足、指導者のモチベーション低下を招き、加盟員増加の機会をつぶしかねない。

### 2. 夏季舎営に関して

ビーバー年代、カブ年代は舎営での記憶が、以後継続して活動を実施するかのモチベーションにつながると考えます。また保護者も、舎営から帰宅した子どもたちの思い出発言によって良いイメージを持っていただければ自分の子供の活動継続(特にビーバー年代は保護者の意思で継続、退団が決まることが多い様に思います。)、他の保護者への声掛けにもつながると考えます。

実証隊活動を見ていると、特にカブ隊の組集会、隊集会において、1年生4月にカブ隊となったスカウトについては、ハイキングやゲームについて体力や、ロープワーク、測量などについての理解面で難しい(スカウトにとってはつまらない)場面が見受けられました。(指導者もいろいろ考え、対応はしてはしましたが)

この状況で舎営に参加しても、良い思い出よりはつらい、つまらない思い出につながる事が多く、また、夏季活動において体力的な差は、リスクをはらむものになってしまうと考えます。

### 3. 試行隊の2020年度の対応に関して

報告を上げた5団において、2020年度の対応として、CS隊を1年4月とした隊が3隊、1年9月とした隊が2隊となっております。ただし4月を選択した隊でも、うち2隊からそれぞれ、「今後については検討の余地有、年長BVSの状況(ビーバー隊活動経験期間・隊人数・個人の状況)により、1年9月選択も有り。」、また「1年生のカブ隊活動は考慮したプログラムの必要有」との意見が上がっております。

せっかくスカウト数が増加したCS隊に対し、1年生の活動を想定することで思い切ったプログラム展開が出来ないのは非常にマイナスとなると考えます。

### 4. BVS隊指導者に関して

BVS隊指導者はこれまでもボーイスカウト活動のエントリー部門として、積極的に保護者の方々と接してきていると思います。今回1年間のエントリー部門となった場合、指導者として自身のスキルアップ、指導者訓練に対するモチベーションの低下、それに伴い保護者との関わりの低下、スキルダウンは、結果として保護者の活動理解も阻害するものと考えます。

基本的に子どもの送り迎えを行うのはBVS年代の保護者が多く、その場でのコミュニケーションはかなり重要だと考えます。

### 5. CS隊指導者に関して

CS隊指導者への教育、カブブックなどを考えた場合、CS隊開始時期を選択制となると、そのターゲット年代が選択結果により異なることとなり、非常にその教育、ブック構成が難しいものになるかと思えます。また現場でのプログラム展開も選択結果により異なるものとなり、他隊のプログラムを参考にする場合の阻害要因となると考えます。

## 6. 保護者の意識に関して

BVS部門を1年間のみエントリー部門としての位置づけの場合、保護者の活動理解がどこまで進むのが不安です。また1年間コミュニケーションをとった指導者に代わり、小学1年生から別の指導者と関わることのデメリットもあると考えます。保護者にとって小学校入学は大きなイベントであり、併せてボーイスカウト活動も変わるとなれば、少なからずストレスになるのではと考えます。

以上